

「次の東京五輪水球代表には京都から複数の選手が入ってほしい」と話す淡川さん(京都市左京区)



淡川(旧姓青山)礼三さん

当時の五輪はアマチュア選手の祭典。会社では社業に励むのが普通で、私も社会人1年目は泳いでいなかった。でも東京五輪日本代表の合宿に招集され、勤務先の許可が出たので

あわかわ・れいぞう 兵庫県出身。小学生で京都市に移り、鴨沂高で水球を始めた。日大に進み、1960年ローマ五輪代表に選出。川島職物に勤めながら、東京五輪代表に選ばれた。鴨沂高水球部のOB会「鴨水会」の会長を務めた。京都市左京区在住。

「な」という思いですね。日本代表の4人が鴨沂高出身で、気心は知れていた。鴨沂高は強豪で、機動力を生かしたプレーが得意だった。代々伝えられてきた「鴨沂シュート」があった。ゴールを背にして泳ぎながら素早くシュートするんです。当時の日本代表が、体の大きな外国人選手相手に唯一通用する武器だったと思います。 次の東京五輪には、京都から日本代表に3、4人入ってほしい。楽しみな選手は多いですよ。

地元勢から再び代表を

也さん(73)と、淡川(旧姓・青山)礼三さん(75)に、自国開催の五輪に懸けた思いや、1984年ロサンゼルス大会を最後に五輪出場を逃している水球男子日本代表の後輩たちへの期待を聞いた。

(河北健太郎)

水球男子 本場欧州と善戦

50年前の東京五輪水球日本代表には、京都ゆかりの5人が選ばれ、世界と戦った。3チームによる予選リーグで本場の欧州勢に2敗して勝利は挙げられなかったものの、その戦いぶりは国民に大きな勇気を与えた。

当時の代表で、ともに鴨沂高出身の竹内和



1964年東京五輪の水球男子のみ行われ、日本代表11人のうち京都関係者は竹内さんと淡川さんのほか、桑原重治さん(故人)＝西京高一成城大出、高木弘毅さん＝鴨沂高一日大出、早月啓左さん＝鴨沂高一早大出。

東京五輪代表に決まった時はうれしと言った。ほっとした。会社に迷惑をかけていたから。でも開会式の直前の練習試合で鼓膜が破れ、本番の試合に出られなくなった。悔しさしかなかった。予選敗退が決まった瞬間は純粋に「一生懸命やった

東京五輪代表のメンバー。右から桑原さん、淡川さん、竹内さん(記念撮影する代表メンバー)。後列右から1人目が淡川さん、同3人目が竹内さん(いずれも提供写真)

世界との戦い 人生の糧

東京五輪は必死で試合内容をほとんど覚えていないんです。私は激しく動くフォワード。相手がシュートした瞬間、攻撃のためすぐ相手ゴールに泳ぎ始めるから息を整えるのに精いっぱい。(初戦のイタリア戦で2ゴールを決めたが)覚えていない

なあ。

日本代表の最年少で唯一の学生でした。でも誇りという感覚はなかった。水球に打ち込む中「(代表で)やらないといかん」という気持ちになっていったから。世界とどう戦うかだけを考え、悲壮感のようなものがあった。次のメキシコ五輪とは重

その分、負けた時も「やるべきことはやってきた」と悔いはなかった。海外合宿を行い、外国人コーチの指導も受けた。学んだのはチームプレーや一つのパスの大切さ。チームで点を取ることをたたき込まれた。それは後の人生でも役に立っていると思います。

「悲壮感のようなものがあった」と50年前の東京五輪を振り返る竹内さん(京都市上京区)＝撮影・中尾悠希



竹内和也さん

たけうち・かずや 京都市左京区出身。鴨沂高で水球を始めた。早大4年で東京五輪代表に選ばれた。卒業後に八幡製鉄に入り、1968年のメキシコ五輪では日本代表の主将を務めた。京都市北区在住。

6年後の東京五輪は、機動力を生かした日本の水球を展開してほしい。仁川アジア大会で男女ともに銀メダルと活躍したから楽しみです

6年後の東京五輪は、機動力を生かした日本の水球を展開してほしい。仁川アジア大会で男女ともに銀メダルと活躍したから楽しみです